

“A Good Man Is Hard To Find” を読む

——キリスト教の視点から——

今 石 正 人

外国文学を読むことには困難がつきまとう。理解し鑑賞するのに文化や宗教の違いは大きな障害になる。その国に生まれその国語を習得し文化を身につけて成人しない限り、その文学を十分には理解できないと言われていた。しかしそれでは、ロシア文学を翻訳で読んで「分かった」気がするのとはなぜか。

それはおそらく世界文学と呼ばれるほどの文学作品は、人間に共通した問題、つまり生き、愛し、死ぬという普遍的な問題を扱っているからである。たとえ風土や言語、宗教や歴史が違って、人間が人間である限り直面しなければならない実存的な問題については、どんな文化に属する人もある一定の範囲で共感し理解できると考えた方がいい。しかし、「分かった」という気持ちはどこか理性の領域での理解に留まり、感情を含めた人間の経験として腑に落ちるのはむずかしく、隔靴搔痒の感はぬぐえない。

Flannery O'Connor の “A Good Man is Hard to Find” という作品を、平均的日本人、つまりキリスト教の理解がほとんどなく、ましてやキリスト教信仰を持たない者が読むとしたら、どこまでこの作品の面白さに共感し、その本質に肉薄できるのだろうか。扱われているのは善悪や人生の根源的意味という普遍的なテーマではあるが、このテーマへのアプローチ方法が、ユダヤ・キリスト教文化の中で培われてきた宗教や哲学に基づいているので、その背景知識を持たない者がどれくらい理解できるであろうか。本稿では主にキリスト教と「神は死んだ」現代の時代精神を視野に入れながら、この作品を読み解くアプローチの一つを提案してみたい。

I

フラナリー・オコナーは1925年アメリカ南部ジョージア州サヴァンナでカトリック教徒の裕福な家庭に一人娘として生まれた。1950年25歳の時に膠原病の一種である紅斑性狼瘡を発症。1964年39歳の若さで亡くなった。長編小説 *Wise Blood* (『賢い血』) と *The Violent Bear It Away* (『激しく攻める者はこれを奪う』), 短編集 *A Good Man Is Hard to Find* (『善人は見つけがたし』) を出版。死後出版されたものに短編集 *Everything That Rises Must Converge* (『高く上って一点へ』), エッセイ集 *Mystery and Manners* (『秘義と習俗』), 書簡集 *The Habit of Being* (『存在することの習慣』) がある。

その生涯を通じて敬虔なカトリック教徒だったオコナーは、キリスト教作家としての明確な姿勢を持っていた。それをエッセイの中で次のように宣言している。「私はキリスト教の正統的立場から物を見る。つまり私にとって人生の意味はキリストによる私たちの救いを中心にし、私がこの世で見るものはその救いとの関連において見るのです。」¹⁾ 彼女は作品を通じて、神がまだ生きて働いており、人間の救済は可能かもしれないということ、あるいは逆に、神がない世界の虚無的なグロテスクさを描こうとした。

彼女の作品の特徴は、平穏無風の日常性という仮面をはぎとり、登場人物の中にひそむ人間的な弱さ、傲慢、偽善、強欲、虚栄、自己中心性などをコミカルに描写し、読者に差し出すということにある。さらに登場人物が内部の弱さに向き合う契機として、人間の狂気や暴力がグロテスクなまでに誇張され戯画化されることも挙げられる。「キリスト教的関心をもった小説家は、現代生活の中に不愉快なゆがみを見いだすだろう。彼にとっての問題は、それらのゆがみを自然なものに見なしている観衆(読者)に、

1) “I see from the standpoint of Christian orthodoxy. This means that for me the meaning of life is centered in our Redemption by Christ and what I see in the world I see in its relation to that.” Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, ed. Sally and Robert Fitzgerald (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969), p. 32.

ゆがみをゆがんだものと見えるようにすることであろう。その際、この敵意をもった観衆に作家のビジョンを伝えるためには、作家はますます暴力的な方法をとることを強いられるであろう。]²⁾ こうした暴力—究極的には無意味で不条理な死—と直面することで、逆説的に神の救済—恩寵の瞬間—を経験する人間の姿を描くのである。

II

短編「善人は見つけがたし」の登場人物は、grandmother（以下「祖母」）とその一人息子ベイリー（Bailey）の家族（嫁と8歳のジョン・ウェスレイ（John Wesley）、妹のジューン・スター（June Star）、赤ん坊、猫のピティ・シング（Pitty Sing）、レストランのオーナー、レッド・サミー（Red Sammy）とその妻、脱獄犯の The Misfit（以下「ミスフィット」、その手下のハイラム（Hiram）とボビー・リー（Bobby Lee））。

物語は前半（第一幕）と後半（第二幕）に別れる。第一幕の冒頭では家族旅行を前に、凶悪犯ミスフィットが逃亡中、と新聞報道されているフロリダ方面には行くべきではないと主張する祖母と、彼女の意見を黙殺する家族が描かれる。翌朝、一家は車でアトランタの自宅を出発。祖母はこっそり愛猫を連れて車に乗り込む。途中一家はレストランに立ち寄り食事をすする。祖母は若い頃訪ねたことのある大農園屋敷をもう一度見たいと思ひ、その屋敷には秘密のパネルがあり銀器が隠されていると子どもに嘘をつき、子どもは「行きたい」と大騒ぎをし、父親ベイリーをしぶしぶ承知させ、一行はその大農園屋敷へ向かう。ところが祖母は、思い出した屋敷は違う州にあったことに気付き驚いて身体を動かした瞬間、隠して連れてきた猫が飛び出し、運転していたベイリーに飛びつき、車は崖から転落。そこへ

2) “The novelist with Christian concerns will find in modern life distortions which are repugnant to him, and his problem will be to make these appear as distortions to an audience which is used to seeing them as natural; and he may well be forced to take ever more violent means to get his vision across to this hostile audience.” *Ibid.*, pp. 33–34.

ミスフィットと手下が車で通りかかる。

第二幕は、祖母とミスフィットの奇妙な対話を中心に展開する。罪と罰、人生の根拠、神による魂の救済といった宗教的問題を語るミスフィットと、命乞いをする祖母のやり取りの間に、家族の殺害が行われる。祖母を除く家族全員が森に連れ込まれて殺害され、追いつめられた祖母はミスフィットの気持ちを変えようと必死の説得を続ける。ミスフィットがイエスによる救済を激しく願っていることが分かり、祖母は一瞬頭がはっきりとして、「あなたは私の子どもの一人だわ (You are one of my babies.)」と言いながらミスフィットの肩に手を触れる。その瞬間彼女は射殺され、物語は「人生に本当の楽しみなんてないんだ (It's no real pleasure in life.)」³⁾ というミスフィットの台詞で終わる。

この作品の特徴は、オコナー自身が「この話 (『善人は見つけがたし』) はジョージアの人々の日常生活を描くという意味での現実性をだそうとしてはいない。話の意味は真剣なものだが、描きかたは様式化され、漫画のしきたりを守っている」⁴⁾ と明言しているように、リアリズムに基づく描写を極力排除していることである。中心人物である祖母やミスフィットに固有名詞は与えられていない。嫁は一貫して「子どもの母 (children's mother)」(p. 117) としか呼ばれないし、赤ん坊の名前も不明。性格描写や心理描写は最小限にとどめられていて、その行動・発言も戯画化されデフォルメされている。嫁の顔は「キャベツのように広くて無邪気 (broad and innocent as a cabbage)」で、頭に巻いた緑色の布の結び目の先は「兎の耳

3) Flannery O'Connor, 'A Good Man Is Hard to Find', *The Complete Stories*, (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969), p. 133. 以下テキストからの引用はこの版による。

4) "This story is, of course, not meant to be realistic in the sense that it portrays the everyday doings of people in Georgia. It is stylized and its conventions are comic even though its meaning is serious." Flannery O'Connor, *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*, ed. Sally Fitzgerald (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), p. 437.

のように (like a rabbit's ears)」(p. 117) 立っている。ジューン・スターはおよそ子どもらしくない辛辣なあてこすりや憎まれ口を繰り返す。陰気でしかめ面のベイリーのあごは「まるで蹄鉄のように (as a horseshoe)」(p. 123) 堅い。レッド・サミーの腹はシャツの下で揺れている「穀物袋のよう (like a sack of meal)」(p. 121) だ。子どもは屋敷を見に行きたいと駄々をこね、運転席の背を足で蹴り、運転しているベイリーは「腎臓への一撃 (the blow in his kidney)」(p. 123) を感じる。「白い大きな顔にオレンジ色の鼻 (gray-striped with a broad white face and an orange nose)」(p. 124-125) をした猫は飛び出して運転しているベイリーの首に「毛虫のように (like a caterpillar)」(p. 125) しがみつく。事故が起きて「わあ～、事故が起こった！ (We've had an ACCIDENT!)」と子どもたちは「狂喜して (in a frenzy of delight)」(p. 125) 叫ぶ。だが祖母が車からはい出してくるのを見ると「でも、誰も死んでいない (But nobody's killed)」(p. 125) とがっかりする。まるでブラック・ユーモア漫画のギャグのようである。ミスフィットと手下に対峙して、ベイリーはこの場を自分に任せると叫び「今にも走り出そうとするランナーのような姿勢で (in the position of a runner about to sprint forward)」しゃがんでいたが動かず、「シャツのオウムと同じ色をした彼の目は青くて真剣だったが、完全に固まっている (His eyes were as blue and intense as the parrots in his shirt and he remained perfectly still.)」(p. 128)

逆にミスフィットは凶悪な脱獄囚でありながら、それとはかけ離れた印象を読者に与える。銀ぶち眼鏡のせいにか「学者風の印象 (a scholarly look)」(p. 126) を与え、女性に対しては「レイディ (lady)」と呼びかけ、祖母の問いかけには「Yes'm / Nome (Yes / No, madam の短縮形)」と丁寧に応える。物腰も物言いも丁重で含羞さえ見せる。ミスフィットを見るなり、祖母が「あなたはミスフィットでしょう！ (You're The Misfit!)」と面とむかって言うと、ベイリーは「子どもたちでさえショックを受けるようなひどいののしり (something that shocked even the children)」(p. 127) を祖

母に浴びせ、祖母は声をたてて泣き出す。それを傍で見ていたミスフィットは顔を赤らめ、「男は時々心にもないことを言うことがあるんです。彼もあんな風に言うつもりはなかったと思いますよ (Sometimes a man says things he don't mean. I don't reckon he meant to talk to you thataway.)」(p. 127) と、祖母を慰める。さらに自分の前にかたまっている家族を前にして、ミスフィットは「なにか言うことを思いつくことができず当惑しているかのようで (he seemed to be embarrassed as if he couldn't think of anything to say)」「レイデイの前でシャツを着てなくて申し訳ない (I'm sorry I don't have on a shirt before you ladies.)」(p. 129) と謝る。一家の陥った深刻な状況とその漫画的な描写、ミスフィットの凶悪性と強い南部訛りの丁重な物言いとギャップは誇張され、読者はこれから起こる事態を予想しながら、ユーモアと同時に底知れぬ不気味さを感じる。

一家が車で移動する第一幕は車窓から見える風景描写、車内での子どもと祖母の会話、立ち寄ったレストランでの様子など、ごくありふれた家族旅行の典型が描かれる。第二幕は一家の車が崖下に転落し、そこにミスフィット一味の乗った車が登場して始まる。第二幕は、空間移動が物語の時間軸になる第一幕とは対照的に、一方が崖で反対側が森に囲まれた、演劇舞台のような崖下で物語は進行する。舞台はシンプルで、森と崖と空とに区切られた閉じられた空間である。死を象徴するかのよう⁵⁾ 背後の森は「高くて暗くて深く (tall and dark and deep)」(p. 125)「暗い大きな口のようにぽかんと開いている (gaped like a dark open mouth)。」(p. 127) 崖下の舞台から見上げる切り取られた空は、慈雨や日光という自然の恵みと無縁な世界を象徴するかのよう⁵⁾に、「雲もないし太陽も出ていない (Don't see no sun but don't see no cloud neither)。」(p. 127)

窮地に追い詰められた家族の反応も、リアリズムからは遠く隔たったも

5) 事故が起こったのは Toomsboro (p. 123) 近郊。架空の地名だが、墓 (tomb) を連想させる。ミスフィットの乗った車は「霊柩車に似た車 (hearse-like automobile)」(p. 126) でやはり死体を連想させる。

のだ。次々と殺害される家族は命乞いをしたり泣き叫んだりすることもなく、無抵抗のまま静かに死に赴く。手下に森へと追い立てられていくベイリーは、暗い木立のはずれにさしかかると振返って、「すぐに戻るからね、母さん。待っててくれよ (I'll be back in a minute, Mamma, wait on me.)」(p. 128) とおよそ場違いな叫び声をあげる。ミスフィットは嫁に「ボビー・リーとハイラムと一緒に向こうに行き、ご主人に合流してもらえますか (would you and that little girl like to step off yonder with Bobby Lee and Hiram and join your husband?)」と丁重に言い、嫁はまるで親切な申し出を受けたかのように、「はい、ありがとうございます (Yes, thank you)」(p. 131) と答える。最後に残された祖母はミスフィットに祈ることを勧め、イエスが彼を救ってくれるようにと、「イエスさま、イエスさま (Jesus, Jesus)」というが、それは「畜生！畜生！」と「呪っているようにも聞こえた。」(p. 131) (Jesus という言葉は発声しただけでは「畜生！」という呪いの言葉にもなる。) この場面も強烈な滑稽感とアイロニーを生み出している。

このように、無辜なる一家六人の殺害という残酷な内容でありながら、読者の同情や戦慄を引き出し、感情移入を容易にするリアリズムの手法は使われず、代わりに祖母とミスフィットのほとんど噛み合わない滑稽で深刻な対話を中心に物語は展開する。物語は完全に反勧善懲悪であり、「善人」である家族は殺害され、「悪人」ミスフィットは生きのびて芝居は終わる。したがって読者は、普通の悲劇が備えているようなカタルシスを味わうことはできない。第一幕は第二幕の序章に過ぎず、第二幕は祖母とミスフィットという登場人物からなる宗教劇あるいは不条理劇として立ち上がってくるのである。つまりこの物語はリアルな悲劇ではなく、寓意性を持った物語として読まれることを作者オコナーは意図していると言えよう。

III

オコナーは、小説を構成する二つの要素について触れ、一つは神秘性 (mystery) であり、もう一つは自分を取り巻く環境から手に入れる習俗

(manners) であると言う。さらに続けて南部作家はこういう小説の材料になる習俗には事欠かない、なぜなら「われわれの住む南部社会は矛盾に富み、アイロニーやコントラストが豊富で、特にその話し言葉が多様である」⁶⁾ からだと言う。

第二幕の宗教劇の分析を始める前に、オコナーを育んだ南部の歴史とその特異性に触れておく。アメリカ南部は温暖な気候と肥沃な土地を生かしてまずタバコ、後に綿花栽培の大規模農業が行われるようになり、プランテーションを基盤とし、黒人奴隷を最下層にもつ英国的貴族文化が栄えた。しかし南北戦争敗退後、南部農本主義の経済体制は北部産業資本主義体制の支配下に入り、北部の大資本による搾取により長い間経済的停滞を余儀なくされた。奴隷制を持ち、南北戦争で敗退し、経済的に困窮をきわめるといった経験は、アメリカ合衆国の他の地域では起こらなかった経験であり、これが南部に独自の文化や精神性を育んできた。「南部精神とは、過去や伝統を美化して現実を退ける感傷主義、ロマン主義の傾向を持ち、土地に対する定着意識や家族意識を重んじ、その底には奴隷制に関する原罪の意識などが混合している」⁷⁾ と言われる。

祖母は、自分が南部社会の貴族の末裔だと自認している。旅行に出かける時、「もし事故があって高速道路で死体をさらすことになっても、レイディであることが一目で分かるように (In case of an accident, anyone seeing her dead on the highway would know at once that she was a lady.)」(p. 118) とびっきり上等の晴着を着て車に乗り込むのは、彼女が幼い時から持ち続けてきた貴族意識からすれば当然なことであり、それは旅行前日も当日もスラックスをはき緑色のスカーフを頭に巻いた嫁と際立った対照をなしている。

6) “One is the sense of mystery and the other is the sense of manners. You get the manners from the texture of existence that surrounds you.... We in the South live in a society that is rich in contradiction, rich in irony, rich in contrast, and particularly rich in its speech.” O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 103.

7) 亀井俊介編『アメリカ文化事典』(東京:研究社出版, 1999), pp. 309-310.

祖母は若い頃、求愛されていた男性から毎週土曜日西瓜をプレゼントされていたが、この男性の名前の頭文字 E. A. T がつけられた西瓜を黒人の男の子に食べられてしまった、と子どもに語って聞かせる。これは、黒人は西瓜が好きであるという一種の偏見と、「食べる (EAT)」と書いてあったから食べた黒人の無知を下敷きにした祖母のお得意の小咄であり、自分の貴族性を何気なく誇示し、同時に黒人の無知を嗤っている。また車窓から見えた、パンツをはいていない黒人の子を指差して、「田舎の黒人の子はね、私たちのようにものを持ってはいないの。私に絵が描けたら、あれ (小屋の戸口に立っている黒人の子) を描くんだけど (Little niggers in the country don't have things like we do. If I could paint, I'd paint that picture)」(p. 119) と子どもに説明する。祖母にとっては最下層に属する黒人の子は憐憫の対象であり絵の素材ではあっても、階級社会がもたらす矛盾や貧困は彼女の意識にのぼることはない。

ジョージア州のことを「こんなところを見てもしょうがない。...テネシーなんて、ど田舎のごみためだし、ジョージアだって汚いところだ (Let's go through Georgia fast so we won't have to look at it much,... Tennessee is just a hillbilly dumping ground,...and Georgia is a lousy state too)」と悪態をつく子どもに対して、「子どもは生まれ故郷の州や、両親や、いろんなものをもっと尊敬したものだよ (children were more respectful of their native states and their parents and everything else)」(p. 119) と諭す。しかし彼女が本当に見たいのは、変容した現実の南部ではない。感傷とともに振返って見たいのは、かつてのプランテーションに象徴される「風とともに去りぬ (Gone With the Wind)」(p. 120) 懐かしくも美しい世界なのである。昼食に立ち寄ったレストランで、サミーが若者にツケでガソリンを売って、代金が回収できなかったことを聞いた祖母は即座に、「それはあなたが善人だからです！ (Because you're a good man!)」(p. 122) と断言し、サミーは一瞬うろたえる。自分の善人性を露とも疑わず、そういう善人はサミーをはじめ、とかくこの現代社会では生きにくい、「善人を見つけ

ることはむずかしい (A good man is hard to find.)」と二人は意気投合し、「古き良き時代 (better times)」(p. 122) を懐かしむ。家族からなにかと無視され疎んじられている祖母は、若者に騙されたサミーと自分を重ねて見ているのだ。

南部のもう一つの特徴は、南部が「バイブル・ベルト」と称され、保守的なキリスト教根本主義 (ファンダメンタリズム) が大きな影響力を持っていることである。彼らは聖書を文字どおり信じるので、聖書の天地創造説に反する合理的・科学的理論を否定し、南部諸州の公立学校では「進化論」を教えることを州法で禁じた。1925年テネシー州でスコープスという名の教師が進化論を教えたとして裁判にかけられ、有罪判決を受ける。(同州法が廃止されたのは1967年になってからである。) キリスト教ファンダメンタリズムは、近代化に伴う合理主義・世俗主義はキリスト教信仰の根本要素を危うくしているという批判に立ち、聖書の権威、キリストの神性、贖罪の効力、罪人の回心や聖化を強調し、自分たちの信仰にくみしない者を排他的に非難攻撃するなどの偏狭な態度を取ったため、裁判では勝利したものの、反知性・反科学というイメージをもたれるようになった。しかし1960年代に入り、黒人公民権運動や女性解放運動などリベラルな社会運動が勢いづく、ファンダメンタリストたちや、もう少し穏やかだが保守主義の強いキリスト教福音派は、伝統的価値観や家族の絆、反共産主義、反妊娠中絶、反同性愛、公立学校での祈りの復活などを訴えて活発に運動を展開し、テレビ放送を使って大衆伝道をするテレヴァンジェリストの活躍もあって、広範囲な支持を得るようになる。彼らは大きくなりではボン・アゲイン・クリスチャンと呼ばれる⁸⁾。

オコナーは南部を「キリストを中心とした (Christ-centered) とはいいい難いが、ほとんど確実にキリストに取り憑かれた (Christ-haunted) と言って

8) 斎藤 眞 他監修『アメリカを知る事典』, p. 407, pp. 587-588.

もかまわないだろう⁹⁾と認めている。図式的に示せば、祖母は南部の伝統的価値観や習俗（manners）を表象し、ミスフィットのイメージは、神秘性（mystery）への契機をはらんだ南部バイブルベルトの「キリストに取り憑かれた」男であり、この二人が「善人は見つけがたし」第二幕を構成する二つの要素である。

IV

オコナーは「善人は見つけがたし」に関して、「英文学の教授へ」宛てた手紙で次のよう述べている。「ミスフィットに最初に気づくのは祖母で、彼のことをずっと気にし続けるのも祖母です。この物語は一種の対決です。祖母の浅薄な信仰に対して、キリストの行為について深い関わり合いを感じ、それが世界のバランスを失わせたとするミスフィットのキリスト観を置いています。」¹⁰⁾

一般的に言うと、小説に込められた作者の意図と作品自体の評価は区別されなければならないが、この作品を理解するためには作者の意図を考慮せざるをえない。というのも前述したように、オコナー自身が、自分はカトリック作家であり、キリスト教の正統的立場から人間や世界を見ると明言しているからだ。この手紙の中の「祖母の浅薄な信仰」とは、祖母の信仰が彼女の全存在を賭けたものではなく、自身の善性或良き市民であることを社会的に証明する便利な飾りの一つに過ぎないという意味であろう。彼女は生きる根拠と規範を、信仰にではなく自身の貴族意識や通俗的道德観などに置いている。したがって転落事故のために彼女の社会的階級を象

-
- 9) “I think it is safe to say that while the South is hardly Christ-centered, it is most certainly Christ-haunted.” O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 44.
- 10) “It is the Grandmother who first recognizes the Misfit and who is most concerned with him throughout. The story is a duel of sorts between the Grandmother and her superficial beliefs and the Misfit's more profoundly felt involvement with Christ's action which set the world off balance for him.” O'Connor, *The Habit of Being*, p. 437.

微する白いすみれを飾った濃紺の帽子のつばが折れ曲がり、やがて外れて地面に落ちてしまう場面は、彼女が社会的アイデンティティを失い、単なる自己中心的な女に変化することを示唆していると言える。

この作品の基本的な構図である「祖母とミスフィットとの一種の対決」を最も単純に要約するなら、「人生の意味やその根拠は何か」という問いに対する姿勢の相違であろう。その相違をウィリアム・ジェームズが分類した「一度生まれの人」と「二度生まれの人」との対比を使って考察してみよう。ジェームズは「一度生まれの人」とはこの世界に生まれてきて、世界を喜んで抱擁できる人で、彼らは幸福感や宇宙的感動は体質的なもので、努力しなくても得られると感じていると言う。「生まれつき陽気な気性 (a naturally sunny disposition)」(p. 121) を持つ祖母は「一度生まれの人」に分類されるであろう。お嬢さまとして生まれ育ち、人生に対して根源的な疑義や不安を持たず、死の恐怖にさらされることもなくこの歳まで生きてきた祖母は、自分の上品で洗練された生き方を顧みることも、生きる意味を問うことも必要なかった。

それに対して「二度生まれの人」は常に憂うつを感じながら生きていて、悦びの感情を味わえない、とジェームズは指摘する¹¹⁾。善なる存在の可能性を信じられず、自分の過失、存在の卑小さ・矮小さに絶えず悩み、悲惨や不条理、虚栄や貪欲、残虐性に絶望し、存在自体を悪と断じる。それは生の意味や根拠が見えないところからくる実存的な不安であり無力感である。オコナーが親近感を抱き、しばしば言及するフランスのキリスト教神学者ブレーズ・パスカルは、人間存在の根源的な不安やはかなさを次のように簡潔明瞭に表現する。「わたしには、自分を閉じこめている宇宙のおそろしいばかりな空間が見えてくる。自分がこの広大な拡がりのほんの片隅につながれた存在であることがわかってくる。しかも、このわたしは、なぜ自分があそこでなく、ここにおかれているのか、知っていない。また、

11) W. ジェームズ 榎田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』(上)(東京:岩波文庫, 2012) 第六・七講 「病める魂」

自分に与えられている生きるためのこのわずかな時間が、わたしに先行するすべての永遠の時と、わたしの後にくるすべての永遠の時の中で、他の地点に定められず、この地点に定められたのかがなぜかも知らない。...わたしがよく知っていることといえば、自分がやがて死なねばならぬということだけである。しかも、どうしても避けることのできないこの死を、わたしはいちばん知らないのである。」¹²⁾

ミスフィットはジェイムズが定義する「二度生まれの人」に限りなく近い。実際かつて父親から「人生に疑問をもたずに一生を過ごす者もいれば、なぜ人生がこうなのか、その訳を知りたがる者もいる。この子（ミスフィット）は知りたがる方の仲間だ。なんにでも首を突っ込みたがる (it's some that can live their whole life out without asking about it and it's others has to know why it is, and this boy is one of the latter)」(p. 128-129)と言われた。人生の意味を問いその答えを見つけようと悪戦苦闘する運命に生まれてきているのである。実際彼はあらゆることに首を突っ込む。「俺はしばらくゴスペル・シンガーをやっていた。...陸軍にも海軍にもいたし内地勤務も外地勤務もやった。二度結婚したし、葬儀屋もした。鉄道工夫も、農夫もした。竜巻にやられたこともあるし、人間が生きながら焼かれるのを一度見たことがある。...おれは悪い子だった覚えはない。ただ、世渡りをするうち、どこかで間違いを犯し、刑務所送りになった。生き埋めにされたんだ (I was a gospel singer for a while,...I been most everything. Been in the arm service, both land and sea, at home and abroad, been twict married, been an undertaker, been with the railroads, plowed Mother Earth, been in a tornado, seen a man burnt alive oncet.... I never was a bad boy that I remember of,...but somewheres along the line I done something wrong and got sent to the penitentiary. I was buried alive)」(p. 129-130)と言う。彼は「生きながら焼かれた」人間を目撃し、自身が刑務所で「生き埋めにさ

12) 田辺 保全訳『バスカル著作集』VII (東京：教文館, 1982), pp. 35-36.

れた」経験を語るのだが、それは人間存在の理不尽さ、悲惨さ、死の恐怖に怯えるミスフィットの、「なぜ」なのかを問う、神への詰問であろう。

第二幕は祖母とミスフィットの対話、あるいは対決を中心に展開するが、その対話には表層の意味の裏にもう一つ別の、象徴的な意味が付加されていると考えなくてはならないだろう。いつも警察に追われる人生を送ってきたというミスフィットに向って祖母は「一つところに落ち着いて安楽に暮らして、追われる心配なしにいられるって、どんなにいいことでしょう (how wonderful it would be to settle down and live a comfortable life and not have to think about somebody chasing you all the time)」と同情する。それに応えてミスフィットは「そうなんだ、いつでもだれかに追われているんだ (Yes'm, somebody is always after you)」(p. 129) とつぶやく。しかしこの対話を文字通り受け取ってはならないだろう。ミスフィットの言説は表面的には投獄、脱獄、逃亡生活など一連の不幸を語っているが、同時にそれは「二度生まれ」のミスフィットが直面してきた実存的疑問と不安を寓意として語っているとも言えるからだ。すなわち、彼を追いかける警察とは死の寓意であり、逃亡生活は死までの残された人生の象徴であり、彼はその時間をせいぜいしたい放題の悪事を働きながら、深い虚無を生きているのである。

「一度生まれ」の祖母にとってミスフィットの苦悩は彼女の理解をはるかに超えている。彼女の死についての想いは、せいぜい自分が交通事故で死んだときにレイディであったと認識してもらえばいいという程度に過ぎなかった。しかし第二幕では一転して、祖母はミスフィットが体現する虚無の闇に向き合わなければならなくなる。

V

演劇は古代ギリシア以来、宿命に翻弄される英雄を通して世界における人間のあり方を問い続けてきた。悲劇が受容される前提には、人間の条件としての因果関係や価値観が広く観客に共有されていたという事実がある。

しかし、この前提が20世紀に入るとしだいに崩れ始め、舞台は人間の行為の無償性と世界の無意味性を表現する場になってきた。これはアルベール・カミュが『シジフォスの神話』で描いた世界でもある。生に根拠を与えてくれる神が不在になった今、無意味で理不尽な世界の中に投げ出された人間が、自分の有限で無力な人生に絶望せずに力強く生きていくためにはどう振る舞うべきなのか。カミュは不条理に直面して、自殺するか、宗教に逃げ込むか、反抗的人間として生きるかという選択肢を考えた。シジフォスは、転げ落ちることが分っている岩をまた押し上げるという行為を通して、人生を無意味だとして絶望し諦めるのではなく、あるいは人生を既成の観念や論理の枠におしこめて割り切るのではなく、人間と世界の間の緊張した対立をそのまま受容し生きることを選ぶのである。しかし「善人は見つけがたし」でオコナーは、シジフォスが選択する生き方ではなく、神秘的な神の啓示によってキリストの救済にあずかる物語を提示しようとする。実存主義作家の思想的価値を認めた上で、「もしヘミングウェイ、カフカ、ジード、カミュなどの作家の経験を語る事ができれば、時代精神に合致した経験を語ることになるだろうが、私が語る事ができるのは哲学者や学者の神ではなく、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神を信じる作家の経験なのである」¹³⁾ と言い切る。

祖母がミスフィットに始めて会った瞬間、彼女は眼鏡の男を見知っているような、妙な気がした。「長年の知り合いのような見覚えのある顔だが、誰だかは思い出せない (His face was as familiar to her as if she had known him all her life but she could not recall who he was.)」(p. 126) という印象を持つ。もちろんその既視感の前日の新聞記事で彼の顔写真を見ていたことも関係はあるだろう。しかしもう一步深読みをするならば、ここで祖母

13) “What I say here would be much more in line with the spirit of our times if I could speak to you about the experience of such novelists as Hemingway and Kafka and Gide and Camus, but all my own experience has been that of the writer who believes...in the God of Abraham, Isaac, and Jacob and not of the philosophers and scholars.” O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 161.

はミスフィットの中に、はっきり自覚できないものの人間の原型のようなものを見いだしたのではないだろうか。正統的キリスト教の立場に立つオコナーの物語は、その根底に人間の原罪が通奏低音のように鳴り響いている¹⁴⁾。「長年の知り合いのような」既視感とは、祖母とミスフィットが共に人間の原罪を負っている類縁性を暗示している。ただ祖母はその罪に無自覚であり罰にもわずらわされることなく平穩浅薄に生きてきた。ミスフィットも罪は忘れていたが、その結果とされる罰がアンバランスだと異議を唱え、イエスによる救済を請い求めている。祖母は初対面のミスフィットに対して同じ原罪を負う人間を無意識に感じとったことを、オコナーは示唆しているように読める。

さらにキリスト教の視点から深読みを試みる。ミスフィットの父は、彼が主張するようにインフルエンザで死んだか、あるいは警察の判決にあるようにミスフィットに殺されているかのどちらかである。しかし事実がどちらであれ、父なしで生きてきたミスフィットを、父なる神を見失った現代人の寓意としてとらえることはあながち牽強付会ではないであろう。第二幕のクライマックス直前でミスフィットは神不在の人間の状況を次のように語る。

「死人を甦らせたのはイエスだけだ。彼はそんなことをすべきじゃなかった。イエスはあらゆるものの釣り合いを崩してしまった。イエスが言った通りのことをやるとすれば、俺たちはすべてを投げ出してイエスに従うほかない。もしやらなかったとしたら、俺たちとしては、残されたわずかな時間を、せいぜいしたい放題やって楽しむしかないだろう—殺しとか、放火とか、その他もろもろの悪事を。悪事だけが楽しみさ。」

Jesus was the only One that ever raised the dead..., and He shouldn't

14) “Drama usually bases itself on the bedrock of original sin.” *Ibid.*, p. 167.

have done it. He thrown everything off balance. If He did what He said, then it's nothing for you to do but throw away everything and follow Him, and if He didn't, then it's nothing for you to do but enjoy the few minutes you got left the best way you can—by killing somebody or burning down his house or doing some other meanness to him. No pleasure but meanness. (p. 132)

「死人を甦らせたイエス」という奇跡は、ルカによる福音書7章に、やもめの一人息子を甦らせたという記事と、ヨハネによる福音書11章に、死んで四日経つラザロという男を墓の中から甦らせたという記事がある。ミスフィットが「死人を甦らせた」という時、それが文字通り生物学的な死者を念頭においているのか、生きていても魂が死んだ状態にある者をたとえて死人と言及しているかは、分からない。しかしどちらであれ、彼はイエスの奇跡を文字通り信じようとする。彼にとっては、すべてを投げ出してイエスに従えば自己の陥っている状況からの脱出が期待できるが、もし従わないのなら永遠に今の虚無的状况に留まり続けなければならない、という二者択一しかない。この二者択一はパスカルが描いたイエス不在の人間の状況と鮮やかに対応している。「イエス・キリストとともにあって」とパスカルは言う。「人間は、悪徳と悲惨からまぬがれる。イエスをはなれては、ただ、悪徳、悲惨、誤り、暗黒、死、絶望だけしかない。」¹⁵⁾

このミスフィットの自暴自棄と思い詰めた真剣さが混じり合った発言に、クリスチャンである祖母は「もしかすると、イエスさまは死人を甦らせなかったかも (Maybe He didn't raise the dead)」(p. 132) と応え、目まいがして堀の中に膝を折って座り込む。キリスト教の核心である復活信仰を否

15) 田辺 保全訳『パスカル著作集』VI p. 534.

さらにパスカルは人間の気晴らしについて語る。気晴らしとは「人々は、死、悲惨さ、無知をいやすことができなかったので、幸福になるために、こういうことは考えずにいようと思いついたのだ」。田辺保全訳『パスカル著作集』VI, p. 133. 註23) も参照

定することで、祖母の信仰が結局は社会的認証のためのステータスのひとつに過ぎないことが決定的に露呈される。

それに対してミスフィットは「俺はそこにいなかったから、イエスが死人を甦らせなかったとは言い切れない (I wasn't there so I can't say He didn't.)」「俺はその場にいたかった (I wisht I had of been there.)」と、こぶしで地面を打って応える。「...もしいたらはっきり (死人を甦らせたということが) 分かっただろうに。...そうすれば俺はこういう人間にならずに済んだんだ (if I had of been there I would of known and I wouldn't be like I am now)」(p. 132) と、ほとんど泣きださんばかりの声で訴える。

なぜミスフィットはイエスに出会わないのか。彼はイエスの奇跡が今ここで目撃できれば信じるが、そうでなければ信じられないと言う。実証主義に毒された懐疑的な現代人であるミスフィットの不幸は、「見ないで信じる」という、信仰が本来的に要請するある種の賭けに身を委ねることができないことにある。復活を信じないトマスに対して、「わたし (復活したイエス) を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネによる福音書20章29節) とイエスはトマスを諷める。信仰とは合理的な確証があって信じるのではなく、見ないで信じることから始まる。

イエスは「天国ではだれが一番偉いのか」と弟子に訊ねられると、幼な子呼び寄せ「こころをいれかえて幼な子のようにならなければ、天国に入ることはできないであろう」(マタイによる福音書18章3節)と言う。子どもの素直な、無知だからこそ信じることのできる能力は、盲信に近い。innocence という言葉は「純粹無垢」という意味と同時に「無知」という意味も持つ。無知だからこそ信じることができるという逆説が成り立つのだが、ミスフィットは目をつぶって信仰へと跳躍することができない。ミスフィットが「子どもがいるといらいらするんだ (Children make me nervous.)」(p. 126)「子どもたちを見張れよ、ボビー・リー。子どもは勘にさわるからな (Watch them children, Bobby Lee. You know they make me nervous.)」(p. 127) とジョン・ウェスレイやジューン・スターにいら

立つのは、自分がもはや子どもの無知と無垢を持ち合わせていないという自覚にあるのではないか。たとえ読者が、この子どもたちは純粹無垢な子どもとはかけ離れた存在であることを知っていても。

VI

ミスフィットの泣き出しそうな顔を見、その内奥の葛藤と苦悩を察知した祖母は一瞬頭が澄みわたり、彼に向かって、「まあ、あなたは私の赤ちゃんだよ。私の実の子だよ！（Why you're one of my babies. You're one of my own children!）」(p. 132) とつぶやく。直前まで「あなたはいい血筋なんでしょう！レイディを撃つはずないわ！立派な家系なんでしょう！お願い！お金は全部あげるから！（You've got good blood! I know you wouldn't shoot a lady! I know you come from nice people!...I'll give you all the money I've got.）」(p. 131-132) と見苦しいまでの命乞いをしていた祖母の、あまりにも唐突な豹変ぶりに読者はとまどう。「私の赤ちゃん」とは何を意味するのか。オコナーは「ミスフィットは、祖母が彼を自分の子どもと認めたとき、彼女を通して恩寵に触れる。同時に祖母は彼の特殊な苦しみを通して恩寵に触れる」¹⁶⁾ と自作について解説するが、祖母の恩寵に触れた結果の変容を、読者はにわかには理解できない。頭が澄みわたって、彼女が直感したことは一体何だったのか。しかし、オコナーは祖母の内面の劇的変化を詳しく説明はしない。それは恩寵としか言いようのない神秘的な出来事 (mystery) だからであり、恩寵はおよそ論理的な言葉で説明することは不可能な、一方的に向こう側からやって来る宗教的啓示だからであろう。

それでも敢えて言語化すれば、次のようなことではないだろうか。祖母は殺される直前になって、神不在の世界に生きるミスフィットの悲惨さと空虚さを直感した。死という虚無に呑み込まれそうになりながら、死ぬま

16) “The Misfit is touched by the Grace that comes through the old lady when she recognizes him as her child, as she has been touched by the Grace that comes through him in his particular suffering.” O'Connor, *The Habit of Being*, p. 389.

での時間をせいぜいしたい放題のことをやって潰している人間の滑稽な現実。そしてそういう生き方から脱却したいとイエスの奇跡を待ち続ける男。そうした弱いはかない存在である人間への憐憫の情と愛おしさを、祖母はミスフィットに感じたのではないか。

祖母は手を伸ばしてミスフィットの肩に触れる。このジェスチャーは、すべての重荷を私が代わって負うからと、傷つき疲れた子どもを抱擁しようとする母性の発露を連想させないだろうか。もしそう仮定するなら、そのジェスチャーはイエスの母性性に通じるものであり、祖母 (**grandmother**) は偉大な母親 (**grand mother**) に変化する。イエスは権威を傘に着的祭司や律法学者、特権意識を持つパリサイ人や、愚かな弟子たちを厳しく叱責し裁断する父性原理を持っていたが、同時に優しい母性原理をも持っていた。イエスの母性原理とは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイによる福音書11章28節)と呼びかけ、社会的な弱者や虐げられた者に徹底的に寄り添うことにある。イエスの福音の根底にあるのは、人間は有限で罪深い、だからゆるされなくては生きていけない存在であるし、ゆるされ新しい人間として生まれ変わることができるというメッセージである。

しかしミスフィットの肩に触った祖母を、ミスフィットは「蛇に噛まれたように後ろに飛びのいて、胸に三発撃ちこんだ (**sprang back as if a snake had bitten him and shot her three times through the chest**)。」(p. 132) 蛇はいうまでもなくエデンの園で禁断の実を食べるようにイブをそそのかしたサタン象徴である。祖母は自分の命を狙うミスフィットを憐れみゆるすという聖性を一瞬取り戻すが、ミスフィットにとってその行為は欺瞞と虚偽にしか映らない。オコナーはしかし、殺された祖母を「血だまりの中に、子どもがするようなあぐらをかいて、その顔は雲一つない空を見上げてかすかに微笑んでいた (**half sat and half lay in a puddle of blood with her legs crossed under her like a child's and her face smiling up at the cloudless sky**)」(p. 132) と描写し、彼女が人生の最期の瞬間に、その罪をゆ

るされて恵みのうちに死んでいったことを暗示する。

先に指摘したように、オコナーは「ミスフィットは、祖母が彼を自分の子どもと認めたとき、彼女を通して恩寵に触れる」¹⁷⁾と自作を解説しているが、ほんとうにミスフィットは恩寵にあずかったのだろうか。多くの読者を悩ませているのはこの疑問である。その疑問を解く手がかりとして、祖母を殺害した後の「この女も一生のうち、一分毎に撃ってやる人がいたら、善人になっていただろうに (She would have been a good woman,...if it had been somebody there to shoot her every minute of her life.)」(p. 133)というミスフィットの台詞を考察してみよう。「一分毎に撃ってやる人がそばにいたら」、つまりいつ何時どこで死ぬかも知れないことを絶えず意識しながら生きることを勧める言葉に「メメント・モリ」がある。「死を想え」というこの言葉は、未来の死という一点から人生を相対化し、人生の総決算をいつでも覚悟しておくようにという意味である。死が間近に顕在化していると、人は一瞬一瞬過ぎ行く「今」をより鮮明に意識し、限られた時間の中でよりよく生を燃焼させることを志向するだろう。しかしその反面、生きることの刹那性を意識し、快楽主義や刹那主義、あるいは虚無主義に陥る危険性もある。

「メメント・モリ」をキリスト教的に解釈すれば次のようなことが言える。聖書によれば人間は神の命令に背いた罪のために死ぬべきものとなった¹⁸⁾。死を意識することで、自己の罪に覚醒し、神のゆるしを求め、神の前に謙虚な善人として生きることができるとも知れないという意味である。祖母は人生で始めて自己の死を意識するが、同時に死が罪の支払う代償であることを自覚し、彼女が自認してきたこの世的な意味においての善人ではなく、見つけがたい善人として生きる可能性をもっていたのではないかと

17) *Ibid.*, p. 389.

18) 「お前(アダム)は女(イブ)の声に従い／取って食べるなど命じた木から食べた。…お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。／お前がそこから取られた土に。／塵にすぎないお前は塵に返る。」創世記3章17-19節
「罪の支払う報酬は死である」ローマ人への手紙6章23節

ミスフィットは直感したのであろう。ミスフィットがこの台詞で始めて祖母のことを「レイディ」と呼ばずに「女」と呼ぶのは、神に創造された罪深い人間、救済を必要とする人間として祖母を見ているからだ。

そうならば、いつも命を狙われ、生物学上の死ばかりでなく魂の死をも意識しているミスフィットは、神のゆるしと恵みにあずかる資格はあるのだろうか。彼がキリスト教信仰の問題で深く悩みイエスの救済を切望しているという理由だけで、その凶悪性は相殺されるのだろうか。祖母を射殺すると、ミスフィットは眼鏡をはずし拭きはじめる。「眼鏡をはずしたミスフィットは、目のふちが赤くなり、青ざめた無防備な顔つきをしていた (Without his glasses, The Misfit's eyes were red-rimmed and pale and defenseless-looking.)。」(p. 132-133) 彼は依然としてこの不条理な世界の中で、子どものように無防備で傷つきやすいのではないか。祖母が死に直面することで恩寵にあずかったことを一瞬目撃はしたが、しかしその恩寵を彼自身が受けることはないように思える。彼はふたたび深い闇の世界に沈んでいく。「人生にほんとうの楽しみなんてないんだ (It's no real pleasure in life)」(p. 133) と物語の最後にミスフィットが吐く台詞は、そのことを雄弁に物語る。

VII

キリスト教に関する基本的な知識も信仰理解も欠け、八百万の神々に囲まれ見守られ、宗教が早くから世俗化し習俗の一部になっている平均的な日本人読者にとって、「善人は見つけがたし」はどのように評価され観賞されるのだろうか。あるいはユダヤ・キリスト教文化圏の中で、教会出席率が依然として43%という高水準を保っている「キリスト教国」アメリカ¹⁹⁾で、この作品はどの程度まで評価されるのだろうか。

興味深い事実がある。ここ数年オコナー文学に対する関心が非常に高

19) http://en.wikipedia.org/wiki/Church_attendance 2013年10月10日

まっていると言えるような状況が生まれているのである。インターネットで検索すると、同時多発テロが発生した2001年以降わずかこの13年間に「善人は見つけがたし」に関する論文が実に約5,700件発表されている。短編集『善人は見つけがたし』が発表された1955年から2000年までの46年間には約2,620件のヒットである²⁰⁾。この数字は何を物語るのだろうか。

もちろん9.11は何らかの確証があるわけではなく、直感で恣意的に選んだ事件であり、それが妥当性を持つのかどうかの検証は今後の研究に俟たれるが、9.11は、それ以前とそれ以後でわれわれの世界認識が大きく変容した事件でもあったことは確かであろう。当時のジョージ・ブッシュ大統領は9.11以後、世界を「善 (good)」と「悪 (evil)」との戦場とみなす発言を繰り返し、同盟国に踏み絵を踏ませた。しかし従来の紛争や戦争と異なり、何が善で何が悪なのか、何が真実で何が偽善なのかが無限に分裂し溶解したように見える世界で、アメリカはいつどこから襲ってくるか分らない見えない敵に戦々恐々としなければならなくなった。ちょうどミスフィットに出合った祖母のように、アメリカばかりでなく世界がむき出しの狂気と暴力、ニヒリズムに直面することになったことが、オコナーのこの物語が広く読まれ研究され解釈される一因になっているのではないかと想像するのは早計であろうか²¹⁾。

実態のつかめないテロリストが起こす無差別テロ事件ばかりではない。アメリカ国内でも動機がはっきりしない無差別殺人事件がかなりの頻度で起きているし、日本国内でも「誰でもいいから殺したかった」という通り魔事件のような、理由や動機が見えない殺人が起きている。まさにミス

20) <http://scholar.google.co.jp/scholar> 2013年10月10日

21) ある批評家は「恩寵の必要性を無視し、苦悩の救済的価値を下落させ、人間存在に固有の神秘性を軽蔑する」ニヒリズムに対して、オコナーは否の立場を鮮明にし、「20世紀の中頃という早い時期に驚くべき洞察力でわれわれの現在の状況を予見した」と指摘している。Henry T. Edmondson III, *Return to Good & Evil: Flannery O'Connor's Response to Nihilism*, (Oxford: Lexington Books, 2002), pp. 2-5.

フィットの「(もし神がないなら) 俺たちとしては、残されたわずかな時間を、せいぜいしたい放題やって楽しむしかないだろう一殺しとか、放火とか、その他もろもろの悪事を」と言うニヒルな台詞が真実味を持って迫ってくるような現実社会の中で、逃げることも防衛することもできず殺されていく犠牲者は、われわれの中にある最も深い最も本能的な恐怖を覚醒させる。他方でそうした現実からの逃避を見いだそうと、末梢神経を過度に刺激するあらゆる種類の娯楽—パスカルの言う「気晴らし」—が大量生産され大量消費される。オコナーはすでに1950年代に、自分を取りまく世界にニヒリズムのにおいを鋭く嗅ぎつけ、「現在、世界全体が魂の闇夜の中を通過しているように見える」²²⁾と指摘し、同時代を「絶望を飼いならし、それと一緒に幸せに暮らすことを学んだ時代」²³⁾と喝破している。しかし、一時的に目をそらすことができて、不安やニヒリズムは心の奥底で増幅され、時代の闇はますます濃く深く拡がっている。9.11以降の終末的な状況とは、テロや無差別通り魔殺人者によって無意味に殺害される無辜な一般市民の悲劇と、「善人は見つけがたし」という物語がどこかで通底する世界にわれわれは生きているということである。そうであるから、「善人は見つけがたし」の読者はかならずしもキリスト教に興味を持っている者に限られないであろう。オコナーが小説で描き、パスカルがスケッチした人間存在の根源的状況の迫真性と正当性を、われわれ現代の読者は深い戦慄をもって認めなければならない。

「善人は見つけがたし」の悲劇は、祖母の軽卒で自己中心的な一連の行動が積み重なって起きた。しかし、彼女の言動が一家殺害に値するかといえば、答えは明らかに否である。たとえ祖母の偽善性や自己中心性が悪として描かれ、その悪に対して罰がくだり最終的に秩序が回復されたと納得するほど、現代人は勸善懲悪の物語をストレートに信じることはできない。

22) “Right now the whole world seems to be going through a dark night of the soul.”
O'Connor, *The Habit of Being*, p. 100.

23) “...an age that has domesticated despair and learned to live with it happily.”
O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 159.

今石：“A Good Man Is Hard To Find”を読む

ミスフィットが断言するとおり、世界は不条理に満ちていて、なにひとつバランスの取れたことは起こらない。そもそもこの物語自体も極端にバランスを欠いている。読者は、人生の不条理に身悶えするミスフィットの呻吟がリアルに感じられ、そちらに全神経を集中させてしまうのに対して、祖母の家族に対しては感情移入がさえぎられ、血なまぐさく悲惨な殺害そのものが次第に架空の出来事のように遠くに感じられ、物語が終わるころには殺された家族五人のことは意識の埒外に置かれていることに気づく。

このバランスが崩れているという感覚は、「なぜこの一家なのか」という偶然性に対する根源的問いから出発しているように思える。現実世界で、たとえば子どもが事故に遭い死んだと仮定しよう。警察は現場検証をし、事故の原因と過程を実証的・科学的に究明し、その真相を親に説明できるかもしれない。しかし親は「なぜ」自分の子どもがその現場にいたのか、「なぜ」死んだのかという問いに対する納得のいく説明は決して得られないだろう。それはその問い自体が、そもそもわれわれがこの現実世界に生まれてきた理由を問うのと全く同質の問いだからである。人間は自分の意志とは無関係にこの世に生れ落ち、自殺を除けば、死は人間の側の人生設計や生きる意志をまったく無視して唐突に訪れる。不慮の事故や理不尽な事件で人間が死んでいくのを目撃すると、生きている、生き残ったということ自体の不可思議さと、死の不条理性に思いが至らないはずはない。しかし、その理不尽さを説明する論理も、受け容れるための哲学や宗教もわれわれ現代人の多くは持ち合わせていない。その結果、パスカルが的確に洞察したように、垣間みた存在の脆弱さを忘れるか無視し、日常の忙しさや気晴らしに気を紛らわせ、あるいは既存の手頃な人生哲学に従って生きていこうとするし、そうでもしないと生きていられないと感じる。

すでに前章で触れたが、「善人は見つけがたし」という物語は、一方で神不在の世界に生きる人間の悲惨と滑稽を活写しているが、他方で見失った神への憧憬のようなものと祈りに似た気持ちが行間から立ち上がってくる。オコナー自身は「恩寵の本質はしばしばその不在を描くことによってのみ、

はっきりとさせられる」²⁴⁾と語っているが、「恩寵の本質」を「神」と置き換えても同じことが言える。しかしその神は、上品で敬虔な善男善女が教会で賛美し、善と悪の戦いを勝利に導く都合のいい神では断じてない。むしろ神とさえ呼ばれないような、人間存在の根底にある神秘性とでもしか形容できない、語り得ぬものなのだろう。ジョセフ・コンラッドに言及しつつ、オコナーは芸術の使命を次のように語っている。「芸術は具体的な現実世界を貫通し、その深底部に根源のイメージ、究極的な真実のイメージを発見する。」²⁵⁾ その語り得ぬ究極的な真理のようなものを見失いそこから外れてしまったわれわれが、神秘的な瞬間を通してもう一度その何ものかとコンタクトを取り和解する契機を与えるのが芸術なのであると。

オコナーの作品は再読を要請する。繰り返し読んではいろいろな解釈を引き出せる曖昧性と多義性を持つからだ。もちろんそこから何を引き出すかは、読者の経験値や洞察力によるし、時代精神という文脈にもよるだろう。オコナーは南部を「キリストに取り憑かれた」と形容した。ある書評氏はオコナーの作品について、その登場人物の「間拔けた意見、哀れな考え、惨めな行為は読者の心につきまとう」²⁶⁾と高く評価した。「善人は見つけがたし」が発表されて60年近く経っても、いまだに多くの読者が熱心に反応するのは、まさにオコナー自身が人々の「心につきまとう」力を持った作家であり、その長い射程を持つ予言がますます真実味を帯びてきているからであろう。

24) “Often the nature of grace can be made plain only by describing its absence.” O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 204.

25) “The artist penetrates the concrete world in order to find at its depths the image of its source, the image of ultimate reality.” *Ibid.*, 157.

26) Orville Prescott, “Books of the Times,” *New York Times*, (10 June, 1955), p. 23.